特別報告

環境教育とは何か

ミカエル　アッチァ
UNEP　環境教育・訓練部長

What is Environmental Education

Michael Atchia
Director, Division of Environmental Education and Training, UNEP

教育に関わる4大目的は、アクセス、平等、生活の質、そして民主制です。環境教育の内容を、教育の4つの目的という側面から述べたいと思います。

第一はアクセスです。教育することによってどういったアクセス、道が開かれるかということです。良い教育は様々な道を開いてくれます。例えば、職業、衣食住、レクリエーション、ボランティア活動、交通、自然、書物、音楽等。教育を受けなかった人にはこういった道が開かれないということから、心も開かれないことになります。教育はこのような多くの目標を達成するためのアクセスを確保することが目的となります。

第二は公平です。社会公正という意味です。ニーズ、能力、願望を、社会公正に関わる教育へのアクセスに生かすこと。つまり、教育によって門戸を解放するということになります。

第三は生活の質で、これは定義をする必要はないと思います。

第四は、民主制、すなわち意志決定の力ということです。人々の教育レベルと、国、地域、個人の民主制レベルとの間に関係があると考えられています。教育が一般に普及していれば、地域社会、個人、あるいは国家であろうと、独裁制によって支配される可能制もなくなってきますし、意志決定の力を失うこともなくなってくるでしょう。

これらの4つの教育の目的は、全て環境教育の目的にも当てはまると思われます。

環境に関わる、ニネスコ、ニネップ、あるいは、あらゆる環境に関わる組織であろうとも同意する教育的なアプローチは、環境を通じて、環境の現場で、環境に関わる、環境のための教育です。

環境を通じて環境教育を行うことは、ある環境を例として挙げることによって行うことです。

環境における教育とは、現場での教育、つまり学校の教室や、実験室でなく、現実の生活の場で行われる教育のことです。

環境に関する教育は、環境に関する様々なこと、例えば、土壌、水、湖沼、海洋、動植物、人間居住、そして人間そのものについての教育です。

ここで、問題を投げかけてみたいと思います。

世界各国で環境教育という場合、環境に関する教育と認識されていますが、これだけでは十分ではありません。なぜなら、環境に関わる情報の収集に終始してしまうためです。これだけですと、環境に関わる知識は豊富になりますが、それだけでは環境教育の成果が現れないということです。

ですから、環境に関する教育だけでなく、環境のための、環境を守るための教育も必要になります。環境を改善、向上していくための教育も必要になります。環境のためを考えると、人間と他の生物の間の均衡を考えることが重要になってきます。人間は、既に地球を意のままに使いすぎると思いますが、動植物にも地球を使う権利があります。従って、環境のための教育は、そういった均衡、平衡を認識し、他の生物にも地球を使う権利があることを認識することが大事だと思います。

この4つのアプローチを一緒にしてこそ、環境教育が信頼できるものとなると思われます。第一が、環境教育を実施する上での目的です。環境教育そのものの目的を考える場合には、よりよい環境への理解をすること。そして、我々の環境に関

日本環境教育学会第4回大会　基調講演。(1993年8月20日、筑波大学)

わる価値観を変えていくことにつながるものです。次が、いかに環境に対処するかという技術です。

最も重要なものが、行動様式、実生活です。環境に対してどのような行動をとるかということが、環境教育の最も重要なテーマであり、環境教育の最終的な目標といえるのではないでしょうか。

環境教育により、行動せしめる上で技術と行動様式が非常に重要なわけです。必要な技術を持たねば向上をもたらすことはできません。日本のような工業国では、製造技術として清浄で、クリーンな技術を使い、リサイクルするという例があります。このような技術なくしては、環境に関わる意義ある活動が達成されません。従って、環境教育の態度、姿勢としては、環境と戦争しない関わり方をすることが必要です。

以上をふまえ、環境教育に関わる私自身の研究について少しお話します。研究の結果明らかになった非常に重要なことは、環境に関わる情報だけで姿勢や態度変化をもたらすことはできないということです。情報だけでは変化をもたらすことは不可能ですが、内にある概念、考え方を変化させることで態度変化が可能になるということです。

環境教育にとって重要な鍵となる概念は非常にたくさんありますが、エッセンスとして次の４つが挙げられます。

環境教育の大きな概念の第一が、「宇宙船地球号」という概念です。地球という惑星は、規模として拡大しているわけではなく、有限なのです。開発や宅地造成によって、多くの農地がなくなってきています。「宇宙船地球号」という宇宙船が縮んできているのです。ですがその扶養している人口が増えてきています。

もう一つの考え方は自然の再生力。この考え方は忘れられがちです。相互依存ということも忘れることが多いものです。相互依存とは、地球上のあらゆるものがそれぞれに連結し、関わりを持っているということです。人間は一人では成り立たないのです。

ここで最も強調したいのは扶養力で、どの位のものをかかえられるかということです。この概念こそが、環境教育の最も重要な概念ということができるかと思います。しかし、この概念は正しい理解がなければ意味がありません。それでは例を引いてみたいと思います。面積一千平方キロの小さな島があったとします。この島が養えるアメリカ人、または日本人の数はどれだけになるでしょうか。それに対してアフリカの人、インドの人であれば、何人かかえることができるでしょうか。扶養力はその人達のライフスタイルにより異なります。もし、アフリカや、インド、中国に住む人たちが、ニューヨークや東京に住む人達と同じライフスタイルをしたとすると、いったいこの惑星地球は何人の人口をかかえることができるでしょう。そうなりますと、社会公正という概念が出て参ります。そこで、世界の環境問題は社会公正の問題ということになります。

最後に、環境教育の新たなチャレンジを挙げたいと思います。

最初は、昨年リオで行われた国連環境開発会議で討議されたように、環境と開発を結婚させるということです。

２番目は、持続可能な開発を支援するということです。これには発展途上国のことはもちろん、先進国のことも含み、人間の発展ということに関わってきます。経済的発展、工業的発展、技術的発展といった成長には限界がありますので、持続可能な開発といった場合、人類の発展を意味しているのです。いかにすればそれを達成できるのでしょう。一つには、生活の質を向上させ維持させるために、個人、地域社会、または国にその力を与えることです。環境に関わる新しい姿勢に関わる理解、価値観、技能、行動様式を環境教育を通して新しく取り入れていることで、生活の質を高める力を与えることができるのです。

最後に、３年前のタイの会議で挙げられた、Environmental Literacy（環境リテラシー）です。リタレイトとは、昔は読み書きや算術ができる人を指しました。環境リテラシーには、読み書き算術以外に、環境に関する知識理解だけではなく、自分が環境に働きかけることができることも含まれなければならいのです。

（文責：中山　和彦）